



新年あけましておめでとうございます

公益財団法人 日本殉職船員顕彰会



会長 工藤 泰三

潮 騷

第 50 号
令和 3 年 1 月 1 日

公益財団法人 日本殉職船員顕彰会
〒102-0083 東京都千代田区麹町四十九
海軍センタービル
電話 〇三・三三三三・〇六六二
FAX 〇三・三三三三・〇六八二

皆さま方におかれましては、おすこやかに新春をお迎えのことと、お慶び申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、経済活動、社会生活に多大な影響を受けた一年となりました。

一日も早い新型コロナウイルス感染症の収束と皆さまのご健勝をお祈り申し上げます。

当会の事業活動も新型コロナウイルス感染症の影響を受け、計画していた事業のいくつかは実施できませんでした。

昨年6月4日に予定しておりました第50回戦没・殉職船員追悼式は、終戦から75年、50回目の節目の記念式典でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により10月から11月に延期いたしました。しかし、緊急事態宣言解除後も感染者数が増加している状況に鑑み、止む無く中止いたしました。

戦没・殉職船員追悼式は中止となりましたが終戦記念日には、観音崎

の「戦没船員の碑」において、私をはじめ当会役員等少人数により献花式を行い、戦没・殉職船員を追悼いたしました。

申し上げるまでもなく、当会は、志半ばで先の大戦で戦禍に倒れ尊い犠牲となられた6万余人の戦没船員と、戦後のわが国の復興を支えてきた海運・水産業のなかで不幸にして海難や労働災害にあわれ、殉職された船員の慰霊顕彰と遺族援護を目的に活動しています。

海運・水産業は大きく変貌し、船員を取り巻く諸環境も大きく変わりましたが、今日の発展と平和は、戦没・殉職した船員の尊い犠牲の上にあることを決して忘れてはなりません。

終戦から75年が過ぎ、戦争を体験しない世代の増加などにより、戦争への意識が薄れつつありますが、私達は、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返さないためにも、戦没・殉職船員への慰霊顕彰事業の重要性を広く国民に伝えていく必要があると思います。

当会は、先の大戦で犠牲となられた戦没船員と、海難等で殉職された船員への思いを絶やすことなく、慰霊顕彰と、ご遺族の援護に一層の努力を続けてまいります。

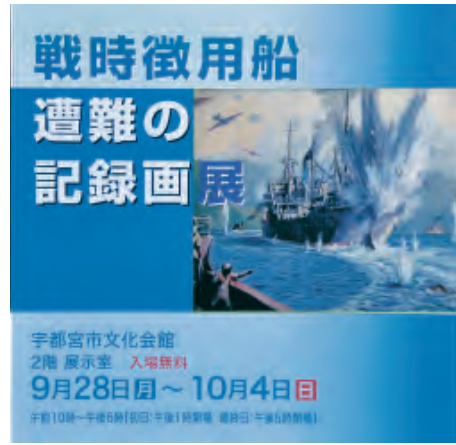
皆さま方におかれましては、本年も旧年に変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

終戦記念日献花式

終戦記念日献花式が令和2年8月15日(土)、からりと晴れ渡った空の下、きらめく浦賀水道が眼前に広がる神奈川県立観音崎公園「戦没船員の碑」(横須賀市)で挙行され、工藤泰三会長はじめ、前職および現職役員ならびに評議員、海事関係者ら約40人が参列した。例年通り、慰霊碑に供花し黙とうを捧げ、戦没船員・殉職船員の御霊の鎮魂と安らかなることを祈るとともに海洋永遠の平和を誓った。

昨年は戦没・殉職船員追悼式が中止となったため、この終戦記念日献花式が当会主催の追悼行事となった。





知られざる民間船舶の悲劇 宇都宮で開催 戦時徴用船遭難の記録画展

第46回「戦時徴用船遭難の記録画展」を、9月28日から10月4日まで、栃木県宇都宮市の「宇都宮市文化会館」で開催した。

新型コロナウイルス感染症の影響にもかかわらず、480人の方々が来場し、壮絶悲惨な戦没船と船員の記録画を熱心に見入っていた。

今回の戦時徴用船遭難の記録画展は、戦没船員ご遺族の篠原昌史さんから、栃木県内では是非開催してほしいとの要望により、初めて栃木県で開催した。

新型コロナウイルス感染症の影響の中で、展示室への入場に当たっては発熱状況のチェック、マスクの着用、手指の消毒を徹底する等、感染防止

対策を講じ入場者の安全確保に努めた。

記録画展は、これまでと同様に貴重な記録画を通して、ご遺族をはじめ多くの皆様に戦時徴用船乗組員の悲惨な実相をお伝えし、戦争の悲惨さを実感していただくとともに、平和の尊さを再認識してもらうことを目的に、日本殉職船員顕彰会が全国を巡回して開催している。

先の大戦で兵隊や軍需物資、資源などの輸利物資を運ぶため民間の船と船員のすべては国の管理のもとに戦時徴用された。殆どの民間の商船は、丸腰（非武装）で満足の護衛もつかない海上輸送に従事し、敵潜水艦の魚雷の絶好の標的となつて、海運・水産で働く6万余人の船員が犠牲となるとともに、商船や機帆船、漁船等約7200隻・880万総トンを超える船舶が失われた。
大阪商船の嘱託画家、大久保一郎

画伯は、戦況の劣勢で社船が次々に撃沈されていった昭和17年（1942）、社長から「失われていく社船を記録に残してほしい」と指示を受け、戦時統制下の厳しい状況の中、生還した船員たちから、沈没する船の様子、船員の遭難状況など戦場の生々しい証言を克明に聞きとって、忠実に記録画として密かに書き残した。
大久保画伯が描いた30号の記録画は、終戦直後のかん口令や復興の混乱の中で行方不明になっていたが、昭和57年（1982）に発見され、これを修復し37点の記録画を公開することとなり、昭和57年（1982）12月、東京日本橋の三越本店で第1回記録画展を開催した。

以来、北海道から沖縄まで、今回で31カ所・46回目の開催となった。

480人が来場

多くの来場者を迎えるため、顕彰会のホームページでの周知と海事関係団体の広報誌、業界紙などに開催案内を掲載していただくとともに、各行政機関、海事関係団体、マスクミ、美術・博物館や宇都宮市近隣の中学校、高等学校、公民館、図書館などにポスターの掲示、リーフレットの配布依頼など、周知・広報活動を幅広く行った。
会期中、ご遺族の方々をはじめ近隣的一般市民や遠方からも、480人が来場した。

大久保一郎画伯 (1889-1976)



大阪商船貨物船「ありぞな丸」宣伝用絵葉書の原画を前に、昭和31年（1956）67歳

- 明治22年 大阪市富島町（現在の西区川口）で生まれる。
- 大正15年 大阪商船（現株商船三井）の嘱託画家に採用、初仕事に南米移民船「らぶらた丸」を描く。以後、同社の宣伝用絵葉書、航路案内、広報誌、ポスターの絵とデザインを担当する。
- 昭和17年 大阪商船、岡田永太郎社長の命により、同社の戦時徴用船最期の記録画を描き始め、終戦までに油彩30号約80点を制作する。
- 昭和51年 1月19日自宅にて死去、享年86歳。
- 昭和57年 旧大阪商船本社倉庫で大久保画伯の遺作37点が発見され、絵画修復家黒江光彦氏により修復。12月に東京日本橋・三越本店で第1回記録画展を開催。6日間の来場者は9000人。

記録画から受けた感動・感想

来場者のうち77人の方々からアンケートとともに記録画から受けた感想が寄せられた。
その中から、来場の動機と感想の一部を紹介します。



10代の驚き

■女性（宇都宮市）会場に来て

それぞれの船で、使われている用語の説明が詳細に書いてあり、絵に対する意識が一層深まった。

■女性（宇都宮市）会場に来て

ドラマチックな数々の絵を見て、当時の空気感や迫力がありりと感じる事が出来ました。

この様な絵で学べるものがとても多く、戦争はしてはいけないと強く思いました。

20代の学び

■男性（栃木県）会場に来て

絵画の中でも一つのテーマに絞って描く画家のうちの一人として、大久保一郎さんを知りました。普段はこうした画家の絵を見ることはあまりないのですが、絵画という形式は、ときに写真や資料よりも強烈な印象を与えるのだなと思いました。特に戦争の「忘れてはならないこと」に対して、何か後世にメッセージを残すならば、媒体も考えて伝える必要があると思いました。

■男性（栃木県）会場に来て

船が船尾から沈没するというものが、いくつか見られたが、なぜ船尾から沈没するのか疑問に思った。船の構造はあまり良く知らないが、どの様になっているのか興味をもった。材料などは現在と過去で違うのか、どのように造られているのかにか

ついても気になった。

戦争でたくさんの方が亡くなったという事は、祖父母からの話や、これまで学校で学んできたが、実際のところは想像できないので、このような展示を見ることは大いに意味のあることだと感じた。

■男性（栃木県）

ポスター（大田原図書館）

戦時中に輸送船が壊滅的な被害を受けたことは前から知っていたが、一つ一つの事例については、それほど知識は持っていなかったもので、今回の様に臨場感ある絵と、解説で知ることが出来良かった。

最近戦時中の情報、記録、事実が急速に忘れ去られているような流れを感じているので、忘れまいとする本展示会はとても有意義なものであると思う。軍事・ミリタリーに興味のない人々にも是非知ってもらいたいと思う。

■女性（宇都宮市）

ポスター（文化会館）

漠然と知っているのみだった戦時の様子について、より深く知り、考えることが出来た。用語解説等もありがたかった。

30代の印象

■女性（栃木県）

友人、知人、家族に聞いて

この絵画展で顕彰会のことを知り

ました。戦時中に徴用船に乗っていた、たくさんの方々の方が亡くなっていることも初めて知りました。

長い時間をかけて色々な場所での絵画展を巡回しているとのこと、これからも活動を続けてください。今日は良い機会を得られて良かったです。

■女性 新聞を見て（朝日新聞）

絵画で見る戦争の記録は初めてで、リアルで驚きました。

DVDもとても良かったが、もっと大画面だったら良かったと思います。

もっと若い人に見に来てほしい。集客に工夫が必要だと思います。見る人がいないと意味がない。マスメディアをもっと活用してください。





絵画を熱心に見る、高校生

40代の感想

■女性 顕彰会からの案内で

関東での開催がある時は、なるべく来場するようにしています。何度見ても、迫力ある絵の中に無数の悲しみと無念を見出し、忘れてはいけない事だと痛感します。

■男性 新聞を見て(下野新聞)

一度見てみたいと思います、本日の新聞を見て参りました。

船員の皆様の思いを感じ、戦火の海で命を落とすことの無い世を願って行動することを改めて思いました。

ぶらじる丸の絵は以前より存じており、一度見てみたいとの思いを大変強く感じました。今後も貴団体の活動が続くことを

切望します。

■男性 (山梨県)

新聞を見て(産経新聞)

作品は画集を見て知っていました。が、実際に拝見できて良かったです。75年経ってもあざやかな色彩が残っており大切に管理されていることと思います。

50代の想い

■女性 (千葉県)

友人、知人、家族に聞いて

多くの人に見てもらいたいと思っただけの展示会を行うのは事務局も大変なことと思います。亡くなった人達の人生を狂わせた戦争。亡くなった方々の無念も、このようなイベントにより癒される事と思われれます。

平和な日本を目指すために戦争に出向かれた一般の人々。今の日本人が彼らの犠牲を無駄にしないようにしたい。そのために、このイベントは大きな役割を果たしていると思います。

私も大変衝撃が残りました。大久保画伯には心から感謝したいです。

■男性 (千葉県) 顕彰会のHPで

毎年、各地で開催して多くの方々に見ていただく活動は、殉職された方々の追悼とともに平和を啓蒙することになると思います。今後も各地で続けてほしいです。



■男性 その他(社内メール)

海運界で働く者として、歴史を学び振り返ることによって商船会社の存在意識を再認識するとともに、先人たちの努力と功績、そして貴重な命の上に働かせていただいていることを肝に命じて、日々の業務に向き合い、また、次世代に海運業を引き継いでいくことに尽力したいと思います。

60代の憤り

■男性 友人、知人、家族に聞いて

戦争を風化させないように継続していただきたいと思えます。何度見ても悲しい気持ちになります。亡くなられた方々は無念なことだったと思います。

■女性 (栃木県)

友人、知人、家族に聞いて

語り継ぐことが大切だと思います。若い人、子供たちは戦争が日本であつたことを知りません。教科書に書いてあるが他人事のようにしか受け止められません。何とか「伝える」ことを続けなければならぬと思います。

■男性 ポスター(栃木県護国神社)

戦争でお国のために出兵した人たちの気持ちや悲惨な戦争を風化させないためにも、語り部など若い人たちに伝えて行って下さい。自分も戦後75年になったが、子・孫たちへ少しでも話をしたいです。

■男性 新聞を見て(朝日新聞)

生々しい状況が直に見れて感動しました。地図(世界)もそえてあれば、なお良かったのでは。





大阪商船「ばたびや丸」船長と機関長のご遺族
中村矩之さん（左）、篠原昌史さん（右）

70代の怒り

■男性（宇都宮市）会場で

悲惨な戦争の様々な出来事で船舶と共に海の藻屑となって散った方々に思いを強くしました。

このような企画を初めて知り二度と戦争を許してはいけないと決意をあらたにした。

戦争につながる策動は国民の知らない、知らされない中でいつの時代でも、途方もないデマとでっち上げで、いつの間にか作られる。真実を見極めることが求められる。

日本は誰のための生命線なのか？政治家が平和を守るためにと声高に叫ぶ時は要注意である。○○ファ

スト言う人々はその傾向にある。本日の企画に感謝します。今後の活躍を期待します。

■女性 新聞を見て（下野新聞）

私は横須賀で生まれました（昭和18年）。父が海軍でありました。戦争が激しくなり栃木県に疎開で来ました。

父は、あまり話はしませんでした。が、今日の絵画を見て、これらの船と運命を共にした乗組員や兵員の悲惨な最期を偲ばずにはられません。

■男性（宇都宮市）

テレビを見て（NHK）

このような絵画があったことは知りませんでした。写真とはまた異なる心に迫るのが大でした。

祖父の兄、大久保正吾（漢字不明）は日本郵船の社員で、日米交換船「コンテ・ヴェルデ」の船長として乗船し、浅間丸とともにアフリカまで行き、拘留された日本人を日本まで連れて帰る役目を果たしたと聞いています。

（※コンテ・ヴェルデ（18,761総トン）＝イタリアの客船で、昭和17年5月、海外の抑留者を交換するため日本が備船し日本籍船とした。乗組員はイタリア人で、日本郵船の船長の指揮のもとに第一次交換船として運航された。）

■女性（宇都宮市）新聞を見て

当時の事を伝えておきたいと思う画家さんの気持ち伝わってきた。

全国を回っている今回の展示に出会えたことをうれしく思うと同時に、たくさんの方の命を無駄にしたくないと切に思いました。

■男性（宇都宮市）会場に来て

戦中、父は徴用で横須賀に行きましたが、幸い無事に帰って来ました。家も空襲で焼けましたが、生命を失うことなく生涯を全うしました。生死の別れは一寸の紙幅ほどです。

資料によると船員の戦死、行方不明等合わせて6万余名との事、残された者の戦後の暮らしはいかがだったのでしょうか。安心して浄土に向かったのでしょうか。戦後補償は、軍人と同じような補償はあったのでしょうか。空襲による死や傷病等々、戦争は終わっていない。



大阪商船「ばたびや丸」船長のご遺族
孫の中村武広さん

■男性（宇都宮市）

新聞を見て（朝日新聞）

戦時徴用船の被害は、NHKのドキュメンタリー番組を見て知っていましたが、このような絵画があることは知らなかった。

犠牲となった方々のご冥福を祈るとともに、日本は何と無謀な戦争をしたのかと改めて思う。

ビデオの中で米軍関係者の証言「日本を降伏させるのは潜水艦と機雷による海上封鎖だけで十分だ」との言葉が全てを物語っているのではないのか。多くの資源を輸入に頼る日本は外国と戦争をできる国ではないと思う。



大阪商船「ばたびや丸」のご遺族、中村矩之さん(左)
篠原昌史さん(中)、篠原尚文さん(右)



■男性 (宇都宮市)

新聞を見て (朝日新聞)

戦時の民間徴用船の犠牲者が5,000人余いる(これは私の認識違いでした)ことは承知していましたが、詳しいことは殆ど知りませんでした。

今回の絵画展を見て、否応なく戦時体制に組み込まれ、犠牲となられた船員の方々の無念を想い、ご冥福を祈らずにはいられません。軍事史や歴史から、ともすれば忘れられてしまいがちな徴用船の実態が、今回の大久保画伯の絵画と、会場に用意された資料によって、多くの方々に伝えられたことは、戦争の記録の継承の一つとして大変意義のある企画

だったと思います。

今後も戦時徴用船の実態を広く伝える企画があれば良いと思いました。

■男性 友人、知人、家族に聞いて

民間船員の犠牲者の多さに驚きました。一般的に余り知られて無い事も今回知りました。戦争の犠牲者は真面目な民間人、子供、女性等、弱者に多く出る。

現在の日本政府は軍事政権と余り変わっていない。特に情報不足がこのころ顕著に出ている。バブル崩壊後に国力が大きく落ち込み、世界情勢も変わって来ていることを真剣に考えて欲しい。

■男性 (栃木県) 新聞を見て

戦時徴用船での犠牲者6万余人もの乗組員が海中に消えていったということは初めて知りました。貴重な当地での初展示を拝見でき、あらためて彼らの戦争遂行能力の差を感じました。

制空権、制海権を失った状況下で航行せざるを得ない、彼らの心中如何ばかりか...と思います。

小生、当地での「軍都としての歩み」や「S20・7・12の宇都宮大空襲」の歴史を検証、展示する活動団体「ピースうつのみや」というところに属している縁で、今回の展示を拝見いたしました。

戦争は勝っても負けても一番の犠牲者は一般人です。その悲惨さと愚かさは二度と繰り返させないよう、今

後とも訴えて行かねばと考えます。

■女性 (栃木県)

新聞を見て (下野新聞)

父親が海軍の徴用船で戦死しました。それで今まではそれといった心に迫ることもありませんでした。でも、日本船舶とのことでしたので、母親の残した言葉を思い出しました。父は昭和20年1月4日戦死。私は昭和18年8月21日生まれです。

写真、絵の様子は、骨は無理なことが解りました。ありがとうございました。

■女性 (宇都宮市) テレビ(NHK)

終戦時は1歳で、全く戦争のことはわからないが、多くの乗組員や船がこの絵画の様な悲惨な状態に



なったことは、非常に悲しい。

このような絵画を多く残してくれた画家に敬意を表したい。是非多くの人に見ていただきたい。また、画家の描きながらのお気持ちを想像すると、胸が詰まるものがある。

■男性 新聞を見て (下野新聞)

ひどい戦争でした。国力も考えず、戦争に走った軍部。若い人たちの命を犠牲にした戦争。

本展示会で海の藻屑となった船の数々に過去の歴史を知りました。この事実を学校教育でしっかり教えなくてはならないと思います。

地理的には米中ロの間にある日本列島。平和があつてこそ日本は国土を維持することが出来ます。祖国日本のために命を失った人々に謹んでご冥福をお祈りいたします。



80代の嘆き

■男性 新聞を見て(朝日新聞)

私の父親が戦争中、日本郵船の船に乗っており何回も沈められているので、今回の展示は身につまされました。

船ごとに戦没船員の数が示されていますが、同時に亡くなった人の数も分かると実感が出ます。

戦時中に、このような生々しい絵が描かれていたことに驚きます。亡くなられる人の深い悲しみがあったのでしよう。

今回の資料は大変良くまとまっていたと思います。戦争の話をはつきり話すことに、いろいろと抵抗があるでしょうが、歴史を残していくこ

とは大切なことでしよう。

このような展示を實行することには、費用と労力が沢山必要でしょう。ご苦勞様でした。

■男性 顕彰会の案内ハガキで

昨年までは毎年、海員学校同窓会として「戦没船員の碑」に参拝している。また、貴顕彰会主催の追悼式にも参列させていただいておりますが、戦時徴用船遭難の記録画展を観ることで、更なる悲しみを感じた。

多くの会員に会報をもって知らしめ、平和日本に努めたい。ありがとうございます。

■男性 新聞を見て(下野新聞)

すごくリアルに描かれていて感銘を受けました。戦争は絶対してはいけません。敵機が住民をめぐけて機銃掃射された経験があります。

かなり多くの徴用船を失ったことを知りました。病院船が沈没したニュースを新聞で見たことが思い出されます。

この記録画は「貴重」です。国民一般にもっと知らせたいですね。大久保様と岡田社長様に感謝いたします。

■男性 テレビを見て(NHK)

年々、太平洋戦争の事が忘れられてしまう昨今、展示された全ての作品、普段は見られないものばかり、あらためて悲惨さを痛感いたしました。

今後とも是非これらの企画をお願いしたいです。写真等にしていただければ教材としても活用できますので、ご検討をお願いいたします。

■男性 テレビを見て(NHK)

特に赤十字のマークのついた船が攻撃を受けたことにショックを受けた。

戦後75年、このような企画をすることは、是非必要な催事だと思つ。私も兵歴2年、永久の平和を願う。

■男性 新聞を見て(下野新聞)

徴用船の乗組員が約6万人、殉職したことは知っていた。

非武装の船で亡くなったことを悲しく思っていたが、本日絵画展を観てあらためて強い感銘を受けた。

戦争は絶対起こしてはならない。憲法9条は日本の宝、世界の宝である。



テレビのインタビューを受ける「ばたびや丸」船長と機関長のご遺族

殉職船員

遺族援護について

当会では外航船・内航船・旅客船・港湾船等の船員として就労中、海難など職務上の事故により死亡した船員のお子さんに對し給付金を支給しています。

船員が死亡した日に、船員の収入により生計を維持していたゼロ歳児から高等学校卒業までのお子さんが対象となります。

詳細については、当会事務局までお問い合わせください。(電話03-3234-0662)

ご遺族からのお便り

殉職船員ご遺族の方々からのお便りを紹介します。

■織田幸恵さん(広島県)

いつもお世話になっております。今日は、下の子どもの13回目のお誕生日でした。「友達がおめでとうと言ってくれた!!」と喜んでいました。離れて住む兄からも「おめでとう」とラインが。あなたかいつなかりにほっこりしました。

■佐藤亜希さん(青森県)

いつもありがとうございます。先日、運動会がありました。例年とは違い午前中だけでしたが頑張っていました。来年は、お弁当が食べられるといいです。



左から船長の孫・中村武広さん、長男・中村矩之さん
機関長の長男・篠原昌史さん、次男の篠原尚文さん



ばたびや丸(大阪商船 貨客船 4,393総トン 海軍徴用船)
昭和19年6月12日、サイパン島から横浜に向け航行中、
米機動部隊の空爆で沈没。船員59名、引揚邦人18名戦死。

戦没船 ばたびや丸

蒼海に眠る父を思い

戦没した大阪商船「ばたびや丸」の船長と機関長の遺族が、「戦時徴用船の記録画展」の会場で初めて面会した。産経新聞の上皇・上皇后陛下が戦没船員に心を寄せている記事に、船長のご遺族、中村武広さん（46歳・福島県いわき市）の祖父への思いが載せられていることを読んで、機関長のご遺族、篠原昌史さん（91歳・栃木県壬生町）が連絡を取り合ってから、9月29日、第46回戦時徴用船遭難の記録画展会場の宇都宮市文化会館で、船長の長男、中村矩之さん（78歳）と孫の武弘さん、機関長の長男、篠原昌史さんと次男の尚文さん（89歳）が、戦後75年を過ぎて劇的な面会を果たし、互いに「父がどんな思いで、蒼海に沈んでいったのかと思う」と感慨深く語り合っていた。

最期の刻に思いを寄せて

中村 武広

(ばたびや丸遺族)

元号も令和となり、かの大战から75年もの年月を経た今年、奇しくも8月15日に、私はある手紙を受け取った。

差出人は戦没船『ばたびや丸』の機関長のご子息、篠原様である。私の祖父も、ばたびや丸の船長として南洋の海に散った。あの日、運命を共にした船長と機関長の後裔が、76年の時を経て再び会することになったのだ。

8月に『ばたびや丸』の記事が産経新聞に掲載されると、これを見た篠原様からお手紙をいただいた。

そして9月には宇都宮で開催された戦時徴用船遭難の記録画展でお会いすることができた。

あの日、同じ船上で最善を尽くし、同じ海に眠る二人は、我々の邂逅をさぞ驚いていることだろう。

戦没・殉職船員追悼式で奉納される能楽『海霊』を思い出した。あの戦争で、私たちはあまりに大きな犠牲を払い、取り返しのない結果を招いた。

しかし、そこから芽生える新たな時代がある。それは今を生きる我々にほかならない。

大久保画伯の画展に深い感動

篠原 昌史

(ばたびや丸遺族)

私にとり今回の記録画展見学は、日本殉職船員顕彰会に要望していた栃木県での記録画展開催が成就したこと、もう一つ、父は大阪商船ばたびや丸の機関長で昭和19年6月12日サイパン沖で米機動部隊の攻撃で散りましたが、同船船長の遺族・中村さんを産経新聞で知り、「展示会場で会おう」と約束しそれが果たされたことが重なって、正にドラマチックな一日でした。

中村さんと一緒に、無防備な輸送船の最期、命がけで退避する船員の悲劇絵を前に、私の頭は、沈みゆく船上で指揮を執る父の壮絶な姿と家庭での笑顔が交錯していました。

多くのメディアの取材を受けましたが、たまたま開戦日に在宅していた父が「船が足らない。」とポツリ呟いたこと、サイパン出航前の数日、何か翳った父の顔つきを子供心として感じていたことなど昔の想い出を語りました。

私は現在、町の遺族会の会長をしています。この悲惨な戦争の実態を次の世代に伝えることが昭和世代として平和を紡ぐ一つの仕事と思っています。

皆様のご厚情に感謝申し上げます

令和元年12月1日以降、令和2年11月30日までの間に、次の方々に新たに賛助会員及び協賛会員として加入いただきました。

また、次の皆様からご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

本会の事業運営は、基本財産の運用益のほか、会員からの会費や寄付金、海運・水産・旅客船などの会社および海事関係団体からの会費や補助金などで、戦没・殉職船員の慰霊・顕彰とご遺族への援護事業を支えています。

会員制度には、賛助会員と協賛会員があります。

■賛助会員には、「法人」と「個人」があり、年会費は◎法人賛助会費 10万円、◎個人賛助会費 10万円を願っています。

■協賛会員は「個人」にお願いしているもので、年会費は103千円です。

当会は、税制上の優遇制度による税額控除の対象法人です。

下記のとおり、当会への寄付金（賛助・協賛会費、献花料等）は、確定申告を行うことにより、「所得控除」「税額控除」の対象となり税金の還付が受けられます。

新たな賛助会員

- 長嶋 孝佳様 (埼玉県入間市)
- 山田 浩之様 (北海道千歳市)

新たな協賛会員

- 石川眞佐子様 (栃木県下都賀郡)

追悼式献花料 (順不同)

- 藤井 靖子様 (広島県府中市)
- 水野 孝子様 (新潟県新潟市)
- 山本 大道様 (山口県下関市)
- 後藤美津子様 (神奈川県横浜市)
- 今田小夜子様 (埼玉県川口市)

一般寄付金 (順不同)

- 鮫島 庸一様 (静岡県掛川市)
- 六川 博様 (神奈川県川崎市)
- 富田 隆滋様 (大阪府池田市)

- 津田 芳子様 (兵庫県揖保郡)
- 山藤 浩子様 (広島県広島市)
- 横須賀市東部漁業協同組合
- 荒川 博様 (東京都三鷹市)
- 小野寺功一様 (宮城県気仙沼市)
- 伊藤 喜市様 (神奈川県横浜市)
- 橋本 則子様 (神奈川県三浦市)
- 多胡 明美様 (東京都小金井市)

- 保木登茂子様 (大阪府豊中市)
- 大西 茂雄様 (東京都世田谷区)
- 古梶 美穂様 (千葉県船橋市)
- 猪股 貞雄様 (東京都清瀬市)
- 三岳 力郎様 (千葉県千葉市)
- 齋藤 延子様 (埼玉県上尾市)
- 荒谷 秀治様 (神奈川県横浜市)
- 吉野 克彦様 (神奈川県横浜市)
- 川田レイ子様 (兵庫県西脇市)
- 関 洋一郎様 (福岡県福岡市)
- 藤井 栄子様 (埼玉県上尾市)
- 岡 靖晃様 (神奈川県横須賀市)
- 山口 英文様 (大分県中津市)
- 鶴丸海運株式会社様 (福岡県北九州市)
- 田中 善治様 (神奈川県横須賀市)
- 篠原 昌史様 (栃木県下都賀郡)
- 高橋 柳子様 (千葉県富里市)
- 栗原 好子様 (栃木県真岡市)
- 橘川 正道様 (埼玉県さいたま市)
- 河尻 直樹様 (東京都墨田区)
- 奥平 安子様 (東京都中央区)
- 若林 喜好様 (栃木県下野市)
- 一田 朋聡様 (神奈川県横浜市)
- 伊藤 喜夫様 (栃木県宇都宮市)
- 鶴澤 昭一様 (栃木県佐野市)
- 野田 玲様 (群馬県邑楽郡)
- 西山 義行様 (栃木県宇都宮市)
- 勝見 豊様 (栃木県佐野市)

遺族援護寄付金 (順不同)

- 関 洋一郎様 (福岡県福岡市)
- 藤井 栄子様 (埼玉県上尾市)
- 岡 靖晃様 (神奈川県横須賀市)
- 山口 英文様 (大分県中津市)

戦時徴用船の最期

大久保一郎遺作展寄付金 (順不同)

- 鶴丸海運株式会社様

- 山蔭 英司様 (埼玉県新座市)
- 日本内航海運組合総連合会様 (東京都千代田区)
- 宮越 和子様 (千葉県佐倉市)
- 米山 隆昭様 (東京都北区)
- 多胡 明美様 (東京都小金井市)

終戦記念日献花式供花料 (順不同)

- 山蔭 英司様 (埼玉県新座市)
- 日本内航海運組合総連合会様 (東京都千代田区)
- 宮越 和子様 (千葉県佐倉市)
- 米山 隆昭様 (東京都北区)
- 多胡 明美様 (東京都小金井市)

寄付金に対する 税制上の優遇措置について (お知らせ)

当会は、平成23年4月1日に「公益財団法人」に認定されたことにより特定公益増進法人に該当することになりました。さらに、平成23年10月27日(平成28年10月17日更新)に「税額控除対象法人」の証明を受けたことから、当会に対する寄付金は、税制上の優遇制度が認められ、確定申告を行うことにより、「所得控除」もしくは「税額控除」が受けられます。なお、ここでいう寄付金は、賛助会費・協賛会費・追悼式の献花料・終戦記念日の献花料および寄付金をさします。

所得税の軽減につながるためぜひ活用ください。

「所得控除」「税額控除」を受けられる際には、当会が発行する「領収証」「公益認定書(写)」「税額控除に係る証明書(写)」が必要になります。

例年11月にお送りしていますので大切に保管してください。

海に殉じた人々へのレクイエム(鎮魂曲)

君は帰る母なる海へ

戦没・殉職船員追悼式で、海上自衛隊横須賀音楽隊が演奏する、海に殉じた人々への鎮魂曲「君は帰る母なる海へ」の由来について紹介します。



「安らかに ねむれ わが友よ 波静かなれ とこしえに」と刻まれた碑文石に捧げられた白菊の花

戦没・殉職船員追悼式で、参列された方々が、御霊に献花を捧げる時に、流れる鎮魂曲「君は帰る母なる海へ」の由来について紹介します。わが国は海洋国でありながら、これまで海に殉じた人々に捧げる鎮魂曲は無いに等しいという状態でした。このことから平成11年、「日本海事広報協会」と「日本殉職船員顕彰会」は、海の犠牲になった人々の鎮魂のための曲を共同で制作することを決定し、その制作資金を広く募集することとしました。

平成11年5月、制作資金募集にあたり日本海事広報協会は、海に殉じた人々への鎮魂歌(葬送曲)の制作を決定したとして、次のように報道発表しました。

『日本海事広報協会と日本殉職船員顕彰会が共同で、海に関わり、海に殉じた人々への鎮魂歌(葬送曲)の制作を決定しましたのでお知らせします。わが国は四面を海に囲まれ、古来、海からさまざまな恩恵を享けることにより、今日の豊かな国を築き上げてきました。私たちは、この大いなる海の恩恵に感謝すると同時に、その犠牲となった多くの人々を忘れてはなりません。ところが、残念なことに、海洋国でありながら、現在、我が国には、海で亡くなった人々のための葬送曲がなく、追悼式などで演奏される曲は、どれも外国の曲ばかりという状態です。

そこで、このたび海事関係団体の皆様方のご推奨のもと、作曲家の都倉俊一氏と作詞家の星野哲郎氏の協力を得て、海の犠牲になった人々の鎮魂のための歌を作ることとなりま

した。なお、この鎮魂歌の制作資金につきましては、広く一般の人々の寄付を募っております。』

として鎮魂歌の制作に着手しました。

平成12年3月に開催された、マリソフォーラム2000「ロマンをもとめて ―海と歌―」(主催・日本海事広報協会、日本海事新聞社)で、海事関係団体や多くの人々のご支援、ご協力によって作られた、海に殉じた人々へのレクイエム(鎮魂歌)「君は帰る母なる海へ」が、ボニージャックスの歌で、初めて披露されました。(歌詞は著作権により省略)

平成11年5月21日号の「海上の友」(日本海事広報協会発行)に、作詞家・星野哲郎さんが、「勇氣と優しさを兼ね備え、いつも先頭に立って任務に専念していた友が、海に殉じた。前触れもなく訪れる、このような別れを、あとに残る者はどのような納得すればよいか。それには『友は、母なる海の懐に帰っていったのだ』と歌うしかないだろう、というのが私の考えです。平和な時も、戦の時も海は日本の生命線です。その最先端に在って、海の安全を守る、真の勇者たちの安全を切に願ってこの詩をささげます」。作曲家・都倉俊一さんは、「日本の葬送曲にはたとえば『海ゆかば』という心にしみこむ音楽がある。しかし、どうしても戦争のイメージが強い。そこで若い

人にも受け入れやすく、21世紀に歌い継がれていくようなものと考えた。あまり暗くなく、心になごむ曲にした」と鎮魂曲への思いを寄せた記事が掲載されています。

第30回戦没・殉職船員追悼式(平成12年5月15日)は天皇皇后両陛下の行幸啓のもとに執り行われました。

海上自衛隊横須賀音楽隊により、吹奏楽用に編曲された「君は帰る母なる海へ―海に殉じた人々へのレクイエム(鎮魂曲)」が追悼式ではじめて演奏され鎮魂曲が流れる中、天皇、皇后両陛下のご供花、参列者の献花が捧げられました。

以来、戦没・殉職船員追悼式では、日本海事広報協会と日本殉職船員顕彰会が共同で制作した鎮魂曲「君は帰る母なる海へ」の演奏がおごそかに流れる中で、「海洋永遠の平和と安全を」願い、戦没船員・殉職船員の御霊に追悼の献花を行っています。



追悼式で「君は帰る母なる海へ」を演奏する海上自衛隊横須賀音楽隊